

アフリカと「アフリカの独立」に関する報道と理解(3)

川 端 正 久

11 1955年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

2月12日 日本貿易センターの開設式はカイロで行われた(毎)。解説「アフリカの土人 むかしからのくらしぶり」(朝)。2月21日 エチオピア政府は日本との外交関係の再開を発表した(朝)。2月23日 久保田鉄工はエジプト政府から水道用鑄鉄管の大量受注に成功した(毎)。3月16日 佐藤特派員(カイロ)報告「日本茶の市場北アフリカ」(毎)。4月6日 エジプトのナセル首相はバンドン会議後に日本を訪問できないと言明した(朝)。4月17日 エジプトのファウジ外相はバンドン会議後に日本を訪問すると発表した(朝)。4月27日 ファウジ外相はヨルダン、レバノン、シリア代表とともに来日した(毎)。5月8日 ファウジ外相は離日した(朝)。解説「[大阪発] 輸送面から解約の恐れ 東アフリカ向けの輸出」(朝)。5月16日 外務省は北田正元(外務省参与)をアフリカ・東南アジアの在外公館査察使として派遣する予定であると報道された。辞令は5月20日(毎)。8月2日 東銀アレキサンドリア支店は開設された(毎)。8月28日 日本・北アフリカ間に国際電話が開通し9月1日から業務を開始することになった(毎)。11月25日 日本政府はエジプト大使に土田豊(法務省中央更生保護審査会委員)の起用を内定した(朝)。11月29日 ナイジェリア

東部州のウルルカ工業相は来日した（毎）。11月30日 ウルルカ工業相は資本・技術援助を日本に要請した（朝・毎）。12月29日 田中外務省情報文化局長は与謝野大使とともにエジプトのフッセイン文相と会談した（朝）。

アフリカと世界

1月11日 フランスとイタリアの首相会談は北アフリカ開発で意見が一致した（毎）。3月12日 インドネシア政府は中央アフリカ連邦がアジア・アフリカ会議への参加を拒否したと発表した（毎）。3月24日 アジア・アフリカ会議事務局はゴールド・コーストが会議への出席を承諾したと発表した（朝）。3月26日 エジプト政府はアジア・アフリカ会議へのエジプト代表团（ナッセル首相他）を発表した（朝）。4月15日 浅岡特派員（ニューデリー）報告「A・A会議に期待するアフリカ」（毎）。4月18日 アジア・アフリカ会議（バンドン会議）は開幕した（朝・毎）。4月19日 エチオピアのハプトワルド外相は会議の冒頭で経済問題の成果を期待すると演説した（毎）。4月21日 バンドン会議政治委員会はモロッコ、チュニジア、アルジェリアに自治と独立を与えるようフランスに要求する決議案を採択した（朝・毎）。4月24日 インドのネール首相は最終会議でアフリカの悲劇を忘れるなと演説した（朝）。アジア・アフリカ会議は共同声明と宣言を採択し終了した（朝・毎）。4月28日 解説「アフリカの“悲劇”と悪」（朝）。解説「A・A民族の祭典」（毎）。5月21日 世界保健機構はスーダンが参加国となることを承認した（朝）。7月20日 アジア・アフリカ諸国はモロッコ・アルジェリア問題を国連総会に提出することを決定した（朝）。7月23日 ワシントン駐在のアラブ諸国代表团はフランス領北アフリカの紛争で米国に調停を要請した（朝・毎）。8月23日 アジア・アフリカ諸国は北アフリカ問題で国連事務総長に調停を要請した（朝）。9月21日 国連総会運営委員会はモロッコ問題、南アフリカ人種問題等5議題の上程を決定した（朝）。9月22日 国連総会運営委員会はアルジェリア問題

を議題とすることを否決した（朝・毎）。9月30日 国連総会はアルジェリア問題を議題にすることを決定し、フランス代表は退場した（朝・毎）。10月5日 国連信託統治委員会はフランス領カメルーン代表に発言の機会を付与することを表決した（朝）。10月14日 アラブ連盟会議はアルジェリア・チュニジア・モロッコの独立支持を決議した（朝）。10月31日 森特派員（ロンドン）報告「アフリカの英植民地」（朝）。11月25日 国連総会はアルジェリア問題を議題から除外し、フランス代表は国連総会に復帰した（朝・毎）。12月3日 国連総会はモロッコ問題を議題から削除した（朝・毎）。12月13日 国連信託統治理事会は英信託統治領トーゴランドの将来を住民投票で決定する勧告案を採択した（毎）。12月15日 国連総会はトーゴランド住民投票勧告案を決定した（毎）。12月29日 ソ連のフルシチョフ第一書記はアフリカの独立を支持すると述べた（毎）。

北アフリカ

エジプト

2月20日 ナセル首相とイーデン外相は会談した（朝）。3月1日 エジプトとイスラエルの軍隊が衝突した（朝・毎）。4月10日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「ナセル・エジプト首相と単独会見」（毎）。5月11日 佐藤前特派員報告「若きエジプト（1）」（毎）；続（2）5月12日、（3）5月13日、（4）5月14日、（5）5月15日。9月30日 辻特派員（ロンドン）報告「エジプトのソ連武器購入」（朝）。10月20日 エジプトとシリアは軍事同盟に調印した（朝・毎）。10月26日 エジプトとサウジアラビアは軍事協定を締結した（朝・毎）。12月18日 酒井特派員（カイロ）報告「世界の歳末②カイロ」（朝）。12月21日 解説「エジプトの計画するアスワン・ハイ・ダム」（朝）。12月23日 酒井特派員（カイロ）報告「エジプトの進む道 ナセル首相、質問に回答」（朝）。12月27日 武藤特派員（ロンドン）報告「エジプトのアスワン・ダム建設計画」（毎）。

[スーダン]

6月11日 ソ連は連絡官の設置許可をスーダン政府に要請した（朝）。8月14日 国家統一党はアサリ首相を除名した。アサリ首相はエジプトと結びついた独立という党の政策から逸脱したと言われた（朝）。8月16日 スーダン議会は民族自決を決議した（朝）。英国とエジプトはスーダンから撤兵すると発表した（朝・毎）。英国外務省はスーダンの将来を決定する人民投票を管理する国際委員会の構成についてエジプト案に同意した（毎）。8月19日 スーダン南部で軍部の反乱が発生しヘルム総督は緊急事態を宣言した（朝・毎）。8月21日 スーダン政府は現議会が地位を決定すると要求した（朝）。8月22日 英軍は9月3日から撤退すると発表された（朝）。8月23日 反乱軍指揮官が逮捕された（毎）。8月24日 解説「風雲はらむスーダン反乱」（毎）。8月26日 ノックス総督は反乱部隊に降伏を命令した（毎）。8月27日 スーダン陸軍の反乱部隊は降伏した（朝・毎）。9月30日 英軍とエジプト軍はスーダン撤退を開始した（朝）。10月11日 英軍はスーダン撤退を開始した（朝）。11月4日 英国外務省はスーダン議会の国民投票案を受諾した（朝）。11月10日 アザリ内閣は総辞職した（朝）。11月21日 スーダンにソ連代表部が設置された（朝）。11月29日 英国とエジプトはスーダン住民投票の実施を決定した（毎）。12月3日 英国とエジプトはスーダン住民投票協定に調印した（朝・毎）。12月12日 ノックス総督は辞表を提出した（朝）。12月19日 スーダン議会は独立を宣言した（朝・毎）。英国とエジプトはスーダン議会の独立宣言を承認した（朝・毎）。12月23日 スーダン上院は独立宣言を承認した（毎）。

リビア

3月21日 佐藤特派員（トリポリ）報告「リビア 最も若くして最も貧しい国」（毎）。8月11日 フランスとリビアは友好条約に調印した（朝）。9月25日 リビアとソ連は外交関係を樹立した（毎）。

〔チュニジア〕

2月5日 ベン・アマル首相は仏の閣僚と協議した（毎）。2月14日 佐

藤特派員（チュニス）報告「風雲の仏領北アフリカ（上）チュニジア」（毎）。3月5日 フランス政府はチュニジアとの会談を再開すると発表した（朝）。3月8日 佐藤巧二特派員（チュニス）報告「チュニジアの旅（上）」（毎）；続（中）3月10日、（下）3月11日。3月15日 フランスとチュニジアは交渉を再開した（毎）。4月13日 黒崎特派員（ジャカルタ）報告「日本の発言を重視 アフリカの民族主義者語る」（毎）。4月21日 フランスとチュニジアはチュニジア自治付与の暫定協定を受諾した（朝・毎）。5月29日 フランスとチュニジアはチュニジア自治協定に仮調印した（朝・毎）。6月1日 ネオ・デストゥール党議長ブルギバは勝利者としてチュニスに帰還した（朝）。6月3日 チュニジア自治協定は正式に調印された（朝・毎）。6月24日 フランスのコティ大統領はチュニジアの全政治犯に大赦を与えた（朝）。8月24日 ネオ・デストゥール党は抑圧政策を放棄するようフランス政府に要望した（朝）。9月2日 フランス北アフリカ問題調整委員会はチュニジアへの借款と贈与を承認した（毎）。9月13日 ベン・アマル首相は辞任した（毎）。9月17日 アマル首相の内閣が成立した（朝）。10月9日 フランス高等弁務官府は149人を特赦することに決定した（朝）。

[モロッコ]

1月26日 佐藤特派員（カサブランカ）報告「モロッコ通信（1）」（毎）；続（2）1月27日、（3）1月28日、（4）1月29日、（5）1月30日。2月15日 佐藤特派員（チュニス）報告「風雲の仏領北アフリカ（中）モロッコ」（毎）。7月15日 カサブランカで暴動が発生した（毎）。7月16日 カサブランカに戒厳令が布かれた（朝）。7月17日 カサブランカの暴動で36人が死亡した（朝）。7月30日 反仏暴動が続いた（朝）。7月31日 暴動で死者30人がでた（朝）。8月16日 民族主義者はベン・ユーセフ退位に抗議して20日にゼネストを行うよう呼びかけた（朝）。8月20日 カサブランカの暴動で90人が死亡した（朝・毎）。フランスとモロッコの会談が開始さ

れた（朝・毎）。8月24日 会談は続行された（朝）。8月26日 会談は終了した（朝）。ベン・アラファ首長は退位を拒否した（毎）。8月27日 「暴徒」がフランス軍に降伏した（毎）。8月28日 解説「仏の北アフリカ政策④」（朝）；「⑤」8月29日。8月29日 フランス政府はフランス・モロッコ協定案（グランヴァール総督とアラファ首長の退任を含む）を承認した（毎）。8月31日 グランヴァール総督は辞職し、ド・ラトゥールが総督に就任した（朝・毎）。9月2日 林特派員（パリ）報告「モロッコ、自治獲得へ一歩」（毎）。9月5日 フランス政府代表カトルー將軍はベン・ユーセフ前首長とマダガスカルで会談した（朝・毎）。アラファ首長は退位を拒否した（毎）。9月8日 カサブランカで暴動が発生した（朝）。9月14日 フランスのフォール首相はモロッコ解決案の実施を延期した（毎）。9月20日 フランス内閣はモロッコ政策を承認した（毎）。9月22日 小島特派員（パリ）報告「複雑さ増すモロッコ問題」（朝）。9月30日 アラファ首長は退任した（毎）。林特派員（パリ）報告「フランスの悩みモロッコ問題」（毎）。10月1日 アラファ首長は首都を離れた（朝）。10月2日 仏軍は反乱軍を攻撃した（朝）。10月3日 武装暴動が発生した（毎）。ベルベル族のゲリラ隊は死者数百人をだした（朝）。欧州人11名が殺害された（朝）。10月4日 イスティクラル党指導者は北アフリカ解放軍を設置したと声明した（毎）。10月15日 フランス政府は摂政会議を設置し摂政4人を任命した（朝・毎）。10月17日 摂政会議の開設式典が開かれた（朝・毎）。10月22日 スリマン（スリマネ）は首相就任を受諾した（朝・毎）。10月30日 アラファ首長は退位した（朝・毎）。11月5日 フランス政府はベン・ユーセフ前首長の復位を承認した（朝・毎）。11月6日 ユーセフ首長とピネー外相は共同コミュニケを発表した（朝）。11月9日 モロッコ総督にデュボアが任命された（朝）。11月16日 ユーセフ首長はラバに到着した（朝）。11月19日 フェズの族長ベルナルディ（ユーセフの政敵）が殺害された（朝・毎）。11月22日 摂政会議は解消された（朝）。11月26日 ユーセフ（龍法 '19）52-1, 148（148）

首長はモハメッド・ベッカイを首相に任命し組閣を要請した（朝・毎）。11月29日 ユーセフ首長はスペイン領モロッコの独立を期待すると述べた（朝）。11月30日 ベッカイは組閣を受諾した（毎）。12月7日 ベッカイ首相の内閣が成立した（朝・毎）。

[アルジェリア]

2月6日 佐藤特派員（アルジェー）報告「アルジェリア通信（上）」（毎）；続（中）2月7日、（下）2月8日。2月17日 佐藤特派員（チュニス）報告「風雲の北アフリカ（下）アルジェリア」（毎）。3月21日 フランス政府はアルジェリアに非常態勢を決定した（毎）。3月31日 フランス国民議会はアルジェリアに非常事態宣言を行う権限を政府に付与する法案を可決した（毎）。4月6日 フランス内務省はアルジェリアの4地方に非常事態を宣言した（朝）。5月19日 暴動が激化した（毎）。フランス政府はアルジェリアへの軍隊増強を決定した（朝・毎）。6月23日 アルジェリア情勢は悪化した（朝・毎）。フランスのモーヌリ内相はアルジェリア情勢が悪化していると述べた（朝）。8月20日 暴動が発生し234人が死亡した（朝・毎）。8月21日 死者は460人以上となった（朝）。9月2日 フランス政府は軍隊を増派した（朝・毎）。フランス内閣はアルジェリア改革案を承認した（毎）。9月13日 フランス政府はアルジェリア共産党を非合法化した（毎）。9月27日 反乱側に死者80人がでた（朝）。9月29日 小島特派員（パリ）報告「紛糾つづくアルジェリア」（朝）。10月12日 解説「アルジェリア問題の推移」（朝）。11月26日 フランス政府はアルジェリアへの補強部隊の派遣を発表した（毎）。12月12日 フランス政府はアルジェリアにおける国民議会議員選挙の延期を承認した（朝）。12月26日 マンデス・フランス前首相はアルジェリア解決策を発表した（朝）。

西アフリカ

[ナイジェリア]

1月14日 佐藤特派員（ポート・ハアコート）報告「西アフリカの日本

品」(朝)。2月28日 佐藤特派員(ハーコート)報告「西アフリカの産業」(朝)。

東アフリカ

[ケニア]

11月27日 ケニアの警察隊はモウモウ団と交戦し11人を殺害した(朝)。

南部アフリカ

[中央アフリカ連邦]

8月10日 中央アフリカ連邦でウラニウム探査が開始されたと報道された(朝)。9月27日 ニアサランド総督にアーミテジ前キプロス島総督が就任した(朝)。

南アフリカ連邦

2月6日 スワート副首相は「南アフリカ連邦は近く共和国となるだろう」と述べた(毎)。7月4日 英国政府は南ア連邦にある海軍基地サイモンスタウンの管理を南ア連邦に移管した(朝)。英国のイーデン首相はアフリカ防衛で国際会議を開催することで南アフリカ連邦と意見の一致を見たと声明した(毎)。10月24日 国連政治委員会で人種差別問題の討議に際して南ア連邦代表は退場した(毎)。11月9日 南ア連邦のプレシス国連代表は国連総会から南ア代表を引き上げると発表した(朝・毎)。

1-2 報道と解説

日本貿易センターは2月12日にカイロに開設された。「[カイロ12日発＝UP特約] カイロの日本貿易センターは12日、マレイ・エジプト通産相、与謝野大使出席の下に開設式が行われた」(毎、2月13日)。エチオピアは2月21日に日本との国交を再開した。「エチオピア 日本と国交を再開 [アディス・アベバ21日発＝AP] エチオピア政府は21日、日本との外交関係再開を発表した」(朝、2月22日)。エジプトのファウジ外相は4月27日に来日した。11月25日にエジプト大使に土田豊の起用が内定した。「エジ

プト大使 土田氏内定 政府はスペイン大使に転出が内定したエジプト大使与謝野秀氏の後任としてこのほど法務省中央厚生保護審査会委員土田豊氏を起用することに内定、近くアグレマンを求めることとなった」（朝、11月26日）。[ただし、その前日、駐エジプト大使に成田勝四郎（駐チリ公使）の起用が内定と伝えられていた（毎、11月25日）。このミスリードの出所は不明である]。

この年、最大の世界史的出来事はアジア・アフリカ会議（バンドン会議、4月18日から24日まで）の開催であった。会議に参加したアフリカ諸国はエジプト、リビア、スーダン、エチオピア、ゴールド・コースト、リベリアの6カ国であった。会議はアフリカの植民地問題をクローズアップさせた。4月21日にモロッコ・チュニジア・アルジェリアに対し即時自治権と独立を与えるようフランスに要請する決議案が採択された。4月24日に共同コミュニケを発表した。会議はアフリカの民族解放運動を加速させる触媒の役割を果たした。「A・A会議に期待するアフリカ [ニューデリー14日浅岡特派員発] アフリカの独立運動の指導者たちは、明らかにA・A会議を植民地主義と人種差別反対の十字軍の輝かしい出発点としようとしている。アフリカ人は明らかにこの会議に歴史的な喜びと誇りを感じている」（毎、4月15日）。バンドン会議は植民地主義反対、アジアとアフリカの協力と連帯の姿勢を明確にした。4月24日にインドのネール首相はアフリカを支援することがアジアの責務であると発言した。「アフリカの悲劇忘るな [バンドン24日発=ロイター] ネール・インド首相は24日、バンドン会議最終会議の席上、次のように演説した。…アフリカの悲運は他のいかなる悲運よりも大きい。アフリカを力の限り助けること、これがアジアの責務である。われわれは兄弟なのだ」（朝、4月25日）。「アフリカの“悲劇”と悪 アジア・アフリカ会議はアフリカの存在を大きく歴史の前面におし出した。アフリカの国々が、国際会議に、対等の資格で招かれ、自由に発言し、自ら決定する権利を与えられたことは史上未だかつてないこ

とであった。…アジア・アフリカ会議は、アフリカの人種問題と民族自決問題を大きくとりあげた。…アジア・アフリカ会議はこのアフリカのなかに酵母を投じる働きをしたことは否めない」(朝、4月28日)。「この会議にはアフリカ人オブザーバーがたくさん出席した。会議の結果を一番喜んだのはこの人たちであったといわれる」(毎、4月28日)。

北アフリカ諸国は独立に向けて動いた。スーダンは独立を宣言した。一旦は住民投票案が成立したけれども、スーダン議会は独立を宣言した。「英国政府は承認 スーダンの独立宣言 [ロンドン=遠藤特派員19日発] スーダン独立の方式については…今年になってからスーダン政府の要望によって人民投票によることが望ましいとされ、この方法について去る12月3日英国、エジプト両国の承認が得られたばかりであった。ところがそれから2週間たつたたぬうちにエル・アザリ・スーダン首相は議会の決議によって独立を宣言する意向を発表、19日これを実現」(朝、12月20日)した。

モロッコは自治獲得へ前進した。「モロッコ、自治獲得へ一歩 [パリ1日林特派員発] 解決の原則は2年前フランスが持ってきた現在のサルタン(首長)ベン・アラファを退位させ、フランスと闘争してきたイスティクルなどの国家主義政党を交えた政府を9月12日までに作ること、…ベン・ユーセフ前首長をとりあえずフランスに戻し、その後の地位をモロッコ政府設立後にきめることの諸点である」(毎、9月2日)。10月30日にアラファ首長は退位し、11月5日にベン・ユーセフ前首長は復位し、12月7日にベッカイ政府が成立した。

チュニジアは自治付与協定を獲得した。「自治付与の協定成る フランス・チュニジア [パリ22日発=AFP] フランスおよびチュニジア両代表団は21日夜パリでチュニジア自治に関する交渉が暫定協定に達したむね当地で公表された」(朝、4月22日)。6月3日に自治協定は正式に調印された。

アルジェリア情勢は悪化した。アルジェリアの民族主義勢力は独立要求を強めた。「紛糾つづくアルジェリア [パリ＝小島特派員28日発] 現在のアルジェリア現地人間の空気はアルジェリアのフランスからの離脱の方に向いており、アルジェリアのフランスへの平等にして完全な合併という政策はもうなんの政治的な魅力もなくなっている」(朝、9月29日)。フランス政府は現地で高まる独立要求を拒否し続け、軍隊を増派し、軍事的にアルジェリアを制圧しようと躍起になった。

サハラ以南アフリカの英領植民地では独立に向けた動きが顕在化した。西アフリカの英領植民地では独立への動きが加速し、それが仏領植民地に影響を与え始めた。「西アフリカの産業 ハーコート 佐藤特派員 英領ゴールド・コーストないしナイジェリアの独立の動きがどんな影響をもたらすか、この辺に結局は仏領西アフリカの今後の問題が潜んでいるようである」(朝、2月28日)。英領東アフリカではケニアに次いでウガンダも動き始めた。「アフリカの英植民地 [ロンドン＝森特派員発] 英国の保護領ウガンダの一部であるブガンダの王様カバカ（ムテサ二世）はこのほど首都カムバラで英国のウガンダ総督コーエンとの間で、両国の関係を規定する新協定に調印した。新協定の意義は、黒人の民族運動と英国植民政策との抗争を双方にとって満足の行く方式で解決したことである」(朝、10月31日)。しかし英国はケニアのマウマウ運動を攻撃し続けた。

佐藤邦人記者(朝日新聞)はナイジェリアを訪問し報告を掲載した。佐藤巧二記者(毎日新聞)はモロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビア、エジプトを訪問し報告を掲載した。佐藤巧二記者はナセル首相と会見しアフリカ植民地について質問した。「問 アフリカにおける外国の植民地政策をどう考えるか。答 圧制された国民を解放するために我々に課せられた責任を果す決心だ。アフリカといわず圧制の存在する限りいかなるところでも闘うつもりでありA・A会議でもこれを強調する」(毎、4月10日)。

「大原美術館 エジプト古代美術展 近代日本油絵名作展」は1955年2月

11-23日に大丸（東京、八重洲口）で開催された。エジプト古代美術展では彫刻・工芸品等80余点が出品された（読売、1955年2月10日；『大原美術館 近代日本油絵名作展 エジプト古代美術展』読売新聞社、1955年2月）。

映画では「ブルーバ」が1955年10月に上映された。広告は「三億の巨費を投じてアメリカ大陸に大ロケ敢行！幾多の危難を冒して完成した日本初の大猛獣映画」（毎、10月5日）、「猛獣に育てられた日本人の物語」（毎、10月23日）であった。南洋一郎原作の映画化で、「和製ターザン映画」と言われた。アフリカ大陸のジャングルをアメリカでロケ撮影した。その他、「エジプト人」「咆えるアフリカ」「キリマンジャロの野獣」「ピラミッド」が公開された。

2-1 論文と著書

論文

東駿一「西アフリカ旅商隊便り スタンからコンゴへ」『大阪貿易館報』1955年1月、20-22頁。「アルジェリア他」国際連合統計部編『国際連合貿易統計年鑑 1953』東京教育研究所、1955年1月、22-25頁他。伊藤隆清「オープン・アカウント地域諸国の経済・貿易の動向について エジプト篇」『外国為替』113号、1955年1月、14-18頁。ベルハッセン・キーアリ「チュニジア 民族闘争と労働者階級」；南アフリカ特別通信員「どんな法律をもつてもわれわれをうえ死に应じさせることはできない」『世界労働組合運動』146号、1955年1月、21-24、41-44頁。市場第二課「スーダン政府わが国にオープンゼネラルライセンス制を適用」『通産省公報』1561号、1955年1月、1頁。「FAOの技術援助活動（四）——アフリカ——」『国際食糧農業』4巻1号、1955年1月、2-7、28頁。東駿一・糸川一誠「西アフリカ旅商団現地報告」『大阪貿易館報』1955年2・3月、19-40頁。「アフリカの学童画」『教育美術』16巻2号、1955年2月、29-30頁。「アフリカの自然と生活」高木達之『高校受験 中学地理』三省堂、1955年2月、（龍法 '19）52-1、154（154）

240-248頁。「エジプトの祝祭日」『海外市場月報』5巻40号、1955年2月、46-47頁。ラクダール・カイディ「アルジェリアでおきている諸事件の真因はなにか」『世界労働組合運動』147号、1955年2月、16-19頁。岸本実（紹介）トレワース・ゼリンスキー「熱帯アフリカの人口分布」、同「ベルギー領アフリカの人口地理学」『地理学評論』28巻2号、1955年2月、97-98、99-100頁。福田豊四郎「藝術のふるさと——エジプト壁画断感」『藝術新潮』6巻2号、1955年2月、84-93頁。三輪福松「砂漠の中の驚異」；三雲祥之助「エジプト壁画の現代性」『美術手帖』91号、1955年2月、46-57、58-63頁。渡邊金一「ビザンツ期埃及の大土地所有制について」『一橋大學研究年報 經濟學研究』1巻、1955年2月、225-279頁。雨宮庸藏「アフリカ民族主義の鼓動」；西野照太郎「黒い潮——マウ・マウ團物語——」；上田秀夫「大陸飛びある記」；「グラビア アフリカは動く」；アンドリュウ・ロス「導火線は短い——南アフリカの動搖——」『世界』111号、1955年3月、132-139、140-144、145-148、149-152頁。石田龍次郎「アフリカ大陸」；中村英勝「西亜・エジプトの歴史」；深井晋司「西亜・エジプトの芸術」座右宝刊行会編『世界寫真地理全集 第3巻 印度・西亜およびアフリカ篇』河出書房、1955年3月、101-128、129-132、133-136頁。伊藤隆吉（書評）西野照太郎「鎖を斷つアフリカ」『政治經濟論叢』5巻1号、1955年3月、126-130頁。川喜田愛郎「エジプト——古王朝を中心に——」『みずゑ』595号、1955年3月、3-28頁。川喜田愛郎「エジプトから帰つて」『科學』25巻3号、1955年3月、41-43頁。ジョン・ガンサー「現代のお伽の国 モロッコ」『リーダーズ・ダイジェスト』10巻3号、1955年3月、123-135頁。「北ローデシア銅山スト 自由労連百万円送る」『海貝』7巻3号、1955年3月、5頁。定金右源二「古代のエジプトとヌビア」『史觀』43・44合冊、1955年3月、373-405頁。アブドラエ・ディアロ「仏領中央アフリカは帝國主義にこれいじょう肉彈を提供することはごめんだ」；ハッセン・サダウィ「權利憲章はすべてのチュニジア労働者の心にこだます

る」『世界労働組合運動』148号、1955年3月、37-38、47-48頁。富永牧太「レブシウス“埃及・エチオピア古蹟圖譜”について」『ビブリア』3号、1955年3月、12-15頁。「南阿におけるインド系市民の待遇他」国際協力局第一課『国際連合第九総会の事業』外務省国際連合局、1955年3月、55-57頁他。西野照太郎・能登志雄・山本謙吾・関敬吾・吉成大志「アフリカ」『世界大百科事典 1（ア—アン）』平凡社、1955年3月、236-253頁。百々巳之助「植民地に於ける議会政治の諸問題（一・二・三）」『日本法學』20巻6号、1955年3月、35-103頁；21巻2号、1955年6月、1-31頁；21巻3号、1955年9月、11-48頁。山辺義昭「東アウガンダに於ける日本商品」『海外貿易情報』61号、1955年3月、9-10頁。岩本実（紹介）ロブケイン「砂糖の島の将来、モーリシャス島の経済と住民」『地理学評論』28巻4号、1955年4月、202-204頁。ディアロ・セイドー「アフリカは自分の道をえらん」『世界労働組合運動』149号、1955年4月、27-29頁。立川「新興市場ローデシア・ニアサランド連邦（一・二）」『輸出綿糸布月報』5巻4号、1955年4月、38-45頁；5巻5号、1955年5月、38-42頁。「西アフリカ旅商団派遣の効果」『世界経済』10巻4号、1955年4月、74-77頁。三輪福松「エジプトの二つの顔」『藝術新潮』6巻4号、1955年4月、91-125頁。山口敏「ピグミーの諸問題」『人類学雑誌』64巻1号、1955年4月、42-44頁。EW・Y「南アフリカにおける人種的差別と教会の立場——バンツール教育法をめぐる——」『福音と世界』10巻4号、1955年4月、55-58頁。和田博徳（書評）イブン・バットゥータ（前嶋信次譯）「三大陸周遊記」『史學』28巻1号、1955年4月、130-131頁。「アフリカ開発とオランダ資本」『海外市場月報』5巻43号、1955年5月、48-51頁。「エジプト」「アフリカ諸国」『通商白書 日本貿易の現状 昭和30年』通商産業省、1955年5月、181、225-226頁。大原久和「モロッコの経済発展に於ける灌漑の意義」；山崎禎一（書評）スタンプ「アフリカ」『國民經濟雑誌』91巻5号、1955年5月、76-81、82-86頁。ジョン・ガンサー「希望と危機の国 ウガンダ」『リーダーズ・（龍法 '19）52-1、156（156）

ダイジェスト』10巻5号、1955年5月、72-79頁。「北アフリカの石油探査状況」『内外石油情報』84号、1955年5月、1-7頁。佐藤邦人「西アフリカ市場の動静」『太平洋問題』14号、1955年5月、10-19頁。「シェラ・レオーネの労働者が射殺されたことにたいして世界労連は抗議する」；アブデル・バシール「分裂策動をうちやぶるスーダン労働者」；アブドラエ・ディア「アフリカ労働組合における組織問題の前進」『世界労働組合運動』150号、1955年5月、27、33-36、37-39頁。谷口五郎「欧米の神経をとがらせた有色人種の大会議 = バンドン会議の内幕をみる =」『實業之日本』58巻11号、1955年5月、53-55頁。「中央アフリカ連邦 北ローデシア銅山のスト」『海外労働経済月報』5巻5号、1955年5月、76-81頁。藤本利治（紹介）P・M・プロセロ「ニジェリアにおける土地利用調査の2・3の問題」『地理学評論』28巻5号、1955年5月、257-259頁。三宅秀乙「タンジール、エチオピアを語る」『輸出綿糸布月報』5巻5号、1955年5月、32-37頁。宮本又次「エジプトからマルセイユまで」『経済人』9巻5号、1955年5月、55-59頁。湯浅克衛「南米移民船同乗記② アフリカ・ロレンソマルケスにて 奥地に待つ“苦闘の生活”」『週刊読売』14巻20号、1955年5月、19頁；「③ 南阿、イースト・ロンドンにて 原住民には暗黒大陸」14巻21号、1955年5月、31頁；「④ ケープタウンにて “東洋のにおい”と別れて」14巻23号、1955年6月、25頁。東駿一「繊維市場としての白領コンゴ」『輸出綿糸布月報』5巻6号、1955年6月、39-41頁。「アフリカ」飯塚浩二編『世界と日本——明日のための人文地理—— 上』大修館書店、1955年6月、200-215頁。ジョン・ガンサー「エジプトの内幕」『リーダーズ・ダイジェスト』10巻6号、1955年6月、68-75頁。岸本実（紹介）ミドゥルトン・グリーンランド「ウガンダのナイル西方地域の土地と住民」『地理学評論』28巻6号、1955年6月、311-313頁。笹崎安雄「西アフリカ港湾事情」『水路要報』48号、1955年6月、97-114頁。佐藤邦人「アフリカの経済について」『経済人』9巻6号、1955年6月、63-65頁。佐藤邦人「スリ

と黒い影 □西アフリカ雑感□』『世界週報』36巻18号、1955年6月、36-37頁。西野照太郎「アジア・アフリカ會議の世界史的意義」；向井啓雄「アフリカの悲しき色氣」『中央公論』70年6号、1955年6月、105-113、125-131頁。西野照太郎「植民地アフリカの労働運動」『世界と日本』18号、1955年6月、50-55頁。「南アフリカにおける弾圧と人種差別にたいし世界労連は抗議する」；「ローデシア銅山労働者の歴史的闘争」；「南ローデシアの幼年労働」『世界労働組合運動』151号、1955年6月、15、16-20、21-22頁。東駿一「ナイゼリア 兎に角ココアを買い付けて欲しい」；貿易館調査部近東アフリカ班「ナイゼリアの貿易の実態」『大阪貿易館報』1955年7月、24、25-29頁。M「売られる黒人」『週刊読売』14巻26号、1955年7月、20頁。カイロ日本貿易斡旋所（赤崎俊朗）「エジプト（上・下）」『大阪貿易館報』1955年7月、1-19頁；1956年1・2月、18-44頁。佐藤邦人「西アフリカの旅」『中学時代』7巻4号、1955年7月、96-101頁。佐藤巧二「アフリカとところどころ（上） 厳しい人種のカーテン」、「（中） 黒人のホープヌクルマ首相」、「（下） 血の風吹くモロッコ」『サンデー毎日』34巻35号、1955年7月、28-29頁；34巻36号、1955年8月、28-29頁；34巻37号、1955年8月、28-29頁。谷川徹三「ピラミッドの中——エジプト紀行」『新論』1巻1号、1955年7月、146-153頁。西野照太郎「仏領北アフリカの教育問題」『教育手帖』53号、1955年7月、10-11頁。「白領コンゴの市場性」；「エジプト経済の近況」『世界経済』10巻7号、1955年7月、72-74、75-77頁。マーガレット・パートリッジ「ケニアの労働者は降伏しない」；「カメルーン 人民は告発する」『世界労働組合運動』153号、1955年7月、13-15、40-42頁。向井啓雄「黒い性戯・白い正義——続・アフリカの悲しき色氣——」『中央公論』70年7号、1955年7月、188-195頁。「モロッコ問題とその背景」『世界情勢旬報』262号、1955年7月、8-17頁。山根銀二「エジプト一泊旅行」『學鐙』52巻7号、1955年7月、50-55頁。R.アヴィラ「モロッコをおとずれた世界労連代表団」；マルセル・デュフリッシュ「中央アフリカ（龍法 '19）52-1, 158（158）」

カにおけるストライキ闘争」『世界労働組合運動』154号、1955年8月、6-8、34-36頁。大崎平八郎「英領アフリカの教育 1」『新しい教室』10巻8号、1955年8月、2-3頁。「初等教育の整備をいそぐエジプト」；「リベリアはほんとうに自由な国か」；「フランス植民地の学校教育」；「南ア連邦とイギリス植民地の学校教育」大崎平八郎他編『世界の教育』門脇書店、1955年8月、116-122、122-126、126-135、136-147頁。西野照太郎「ウラニウムの経済学 □南アフリカを変えるもの□」『世界週報』36巻23号、1955年8月、76-77頁。「白領コンゴ」；「中央アフリカ連邦」；「ナイジェリア」『海外市場月報』5巻46号、1955年8月、30-32、32、32-33頁。林寿郎「開けゆく原始の国 アフリカ」『小学六年生』8巻6号、1955年8月、178-183頁。向井啓雄「南ア連邦の印象——破滅への道をたどる国——」『世界と日本』20号、1955年8月、68-73頁。飯塚「目覚めた暗黒大陸——北アフリカ暴動の背景——」『週刊読売』14巻36号、1955年9月、31頁。井上勇「モロッコは救われるか フランスの勇断を望む」『世界週報』36巻26号、1955年9月、16-17頁。H「モロッコ暴動の国際的意義」『エコノミスト』33巻37号、1955年9月、40-41頁。「エチオピアの経済・貿易事情」『外国為替』126号、1955年9月、12-14頁。「エジプトにて」「ピラミッド」『小林秀雄全集 第八巻』1955年9月、245-249、267-269頁。グロトウスキー「南アフリカ金鉱山の巻上立坑」『グルッケアウフ』4巻8号、1955年9月、373-381頁。河野七司「エジプトの石油事情」『内外石油情報』87号、1955年9月、7-12頁。「植民地の怒り——モロッコ・アルジェリア——」『アサヒグラフ』1620号、1955年9月、12-13頁。「前途多難のアジア、アフリカ問題」『世界の動き』43号、1955年9月、20-31頁。西澤恭三郎「アフリカところ所——みてきた西アの近況を中心として——」『輸出綿糸布月報』5巻9号、1955年9月、39-45頁。西野照太郎「南ア連邦とウラニウムの経済学——金の政治学を変えうるか——」『世界と日本』21号、1955年9月、30-35頁。「ベルギー領コンゴの教育近況」『教育技術』10巻6号、1955年9月、98-99頁。「ベル

ギー領コンゴの経済」『国際食糧農業』4巻9号、1955年9月、14-18頁。「モロッコ事件の内幕」『資料国際事情』158号、1955年9月、6-12頁。「モロッコ紛争は仏内閣の命取りとなる」『日本経済新報』8巻26号、1955年9月、14-15頁。「モロッコ問題とその背景」『世界情勢旬報』262号、1955年9月、8-17頁。井上勇「モロッコの夜明け前 騒乱の背後にあるもの」『世界週報』36巻28号、1955年10月、22-26頁。「新興アラブの盟主・エジプト」；「物情騒然たる北アフリカ」；「新大陸への足がかり・西アフリカ」大宅壮一『世界の裏街道を行く』文藝春秋社、1955年10月、59-67、318-333、334-345頁。進藤次郎「エチオピア皇族・婚姻事件」『文藝春秋』33巻20号、1955年10月、166-171頁。鈴木八司「エジプトの考古学」三上次男編『日本考古学講座 2 考古学研究の歴史と現状』河出書房、1955年10月、178-202頁。鈴木誠「南アフリカのネアンデルタール頭蓋新資料」『人類学雑誌』64巻2号、1955年10月、37-39頁。「動乱の北アフリカ」『世界と日本』22号、1955年10月、15-16頁。「南阿連邦の対アフリカ貿易」『Chamber』68号、1955年10月、42-43頁。西野照太郎「日本とアフリカ □もつと現実的な関心を□」『世界週報』36巻30号、1955年10月、28-29頁。向井啓雄「魂うばうタンジール」『中央公論』70年10号、1955年10月、238-243頁。山崎功「ゆらぐ北アフリカ」『政治経済』8巻11号、1955年10月、18-19頁。「アラブ連盟の中心エジプト」市川義夫『アジア・アラブの印象（紙類海外市場を訪ねて）』本州製紙、1955年11月、107-129頁。鬼丸「最近におけるエジプトの財政・経済事情」『調査月報』（大蔵省）44巻11号、1955年11月、62-74頁。「北アフリカ問題に悩むフランス」『世界の動き』45号、1955年11月、29-34頁。木村睦男「近東・エジプトへの旅日記」『国際観光』41号、1955年11月、14-19頁。ハッセン・サダウィ「世界労連はチュニジア人労働者の利益をまもってきた」『世界労働組合運動』157号、1955年11月、38-40頁。「スエズ問題と英軍の撤退」；「エジプト政変」；「エジプト回教同志会の弾圧」；「スーダンの政情」外務省欧米局第七課『中近（龍法 '19）52-1、160（160）

東の動き』外務省欧米局、1955年11月、33-38、39-52、55-56、57-63頁。
 寺崎太郎「モロッコの叛亂——國連をゆさぶる——」『東京だより』76号、
 1955年11月、54-65頁。「独立を叫ぶ植民地アフリカ」『實業之日本』58巻
 27号、1955年11月、79頁。「フランスと北ア植民地 <ゆらぐ本国・めざ
 める民族>」『世界週報』36巻31号、1955年11月、27-33頁。「モロッコ事
 件とフランス帝国主義」『世界經濟年報 第20集 1955-Ⅲ』大月書店、
 1955年11月、195-205頁。「モロッコの騒乱」（大宅壮一）；「ベルギー領・
 アフリカ・コンゴ」『國際文化画報』7巻11号、1955年11月、11-13、
 16-19頁。「アフリカ經濟の近況」『國際食糧農業』4巻12号、1955年12月、
 7-12頁。「アフリカの自然と生活」山本幸雄『ひとりで学べる中学生の社
 会科 地理の先生』昇龍堂、1955年12月、349-362頁。石塚長臣「急速に
 変貌する中近東とアフリカ」『実業之世界』52巻19号、1955年12月、38-40
 頁。外務省經濟局第六課「ベルギー領コンゴの為替と外国貿易管理制度
 (一・二・三・四)」『海外貿易情報』229号、1955年12月、8-11頁；230号、
 1955年12月、6-10頁；231号、1956年1月、5-9頁；232号、1956年1月、4-12
 頁。久保敏夫「北阿の民族主義運動」『新論』1巻6号、1955年12月、58-62
 頁。ケニアの一労働組合員「ケニアの労働者は世界労連十周年記念日にあ
 いさつをおくる」；アルバート・ラザフィン・ヨワニー「マダガスカルの労
 働者はけつして世界労連をわすれない」『世界労働組合運動』158号、1955
 年12月、11-13、14-15頁。佐藤巧二「光をもとめて立ちあがる国々」『六
 年の学習』10巻9号、1955年12月、60-65頁。「中華人民共和国政府とエジ
 プト共和国政府との貿易協定」『アジア經濟旬報』272号、1955年12月、
 34-38頁。西野照太郎「北アフリカの現状をどう理解するか」；クロード・
 ブールデ「モロッコの危機——フランスの政策は撥ねかえる——」；ガマ
 ル・アブドル・ナセル「民族主義革命の渦中から——『革命の哲學』より
 ——」『世界』120号、1955年12月、44-52、53-56、22、57-66、42頁。横正
 「風雲急を告げる中東、北アフリカ」『自警』37巻12号、1955年12月、

79-81頁。

著書

外務省経済局第四課『スターリング地域貿易事情（一九五四年）第十一 西アフリカの貿易事情』；『スターリング地域貿易事情（一九五四年）第十二 東アフリカの貿易事情』外務省経済局、1955年1月。通商産業省通商政策局総務課通商調査課（山内豊秋）『わが貿易市場としてのアフリカ（前編）』（『通商調査月報』46号）貿易調査会、1955年2月；『（後編）』（『通商調査月報』55号）貿易調査会、1955年11月。デレック・カートゥン（白井泰四郎訳）『起ち上るアフリカ 帝国主義をゆるがすもの』理論社、1955年3月。国立国会図書館調査立法考査局『アジア・アフリカ会議とコロボ諸国の意図（附 アジア・アフリカ会議に出席するアフリカ諸国の現状）』（『調査速報』23号）、1955年5月。海外貿易振興会『エジプトとは』（JETRO調査資料23号）海外貿易振興会、1955年6月。『リビア連合王国憲法』（『和訳各国憲法集 三三』）衆議院法制局、1955年（6月）。R・ダグモア（内山賢次訳）『アフリカ・ジャングル 動物記』評論社、1955年7月。外務省欧米局第七課『アラブ民族運動とアラブ連盟』（欧米七資料1号）；『スエズ撤退およびスダン回収問題』（欧米七資料3号）外務省欧米局、1955年11月。外務省国際協力局第二課『南ア連邦の国連代表引揚声明と南西アフリカ委任統治領問題の経緯』（協二資料29号）外務省国際協力局、1955年11月；『リビア経済援助に関する第10総会決議の件』（協二資料51号）外務省国際協力局、1955年12月。M.マチエ（福井研介・杉勇訳）『エジプトの少年』岩波書店、1955年12月。

2-2 文献と概説

外務省はアフリカ問題に関する調査を実施した。外務省経済局第四課は『西アフリカの貿易事情』と『東アフリカの貿易事情』を、外務省欧米局第七課は『アラブ民族運動とアラブ連盟』と『スエズ撤退およびスダン回
（龍法 '19）52-1, 162（162）

収問題』を、外務省国際協力局第二課は『南ア連邦の国連代表引揚声明と南西アフリカ委任統治領問題の経緯』と『リビア経済援助に関する第10総会決議の件』を作成した。

通商産業省はアフリカ市場に関する調査を実施した。通商産業省通商政策局総務課通商調査課は『わが貿易市場としてのアフリカ』を刊行した。『通商白書 日本貿易の現状 昭和30年』は中近東諸国においてエジプトを、アフリカ諸国においてリベリア、イギリス領西アフリカ、イギリス領東アフリカ、南アフリカ連邦を取り上げた。日本のエジプトに対する輸出が増加した件については、「53年11月日本とエジプトとの通商協定締結以後は、貿易管理面におけるわが国の地位が改善され、従来ドル地域として認められてきたため厳重な統制が緩和され、輸入権獲得が容易となる等、事情がわが国の輸出に有利となつたためである」（181頁）と説明した。アフリカ諸国との貿易では日本の努力不足を指摘した。「この地域にはわが国業者の出先機関は僅少であり、商品の売込努力に不十分な点がみられるのでその充実が望まれる」（225頁）。

西アフリカ旅商団はアフリカ市場調査を目的として派遣された。「西アフリカ旅商団現地報告」と「西アフリカ旅商団派遣の効果」によれば、旅商団の団長は東駿一（大阪府立貿易館調査部長）、団員は西沢恭三郎（西沢）、島本末晴（日棉実業）、市山啓三（東洋棉花）、陶浪昇（江商）、糸川一誠（海外貿易振興会）から構成された。西アフリカ旅商団は1954年11月10日から1955年2月21日まで約80日間、アフリカ諸都市（カイロ、カルツーム、スタンリーヴィル、ウズンブラ、エリザベスヴィル、レオポルドヴィル、ルアンダ、カノ、ラゴス、アックラ、モンロヴィア、ガンビア、ダカール、カサブランカ、タンジール、アルジャ、チュニス、トリポリ、カイロ）を訪問し調査を実施した。結論は厳しかった。「わが商品の宣伝普及の足りなさ、対日貿易の不利な段階にある実情をまざまざと目で見、耳で聞き、各地政府機関よりは政治的な案件まで投げつけられ、幾多の苦

労を重ねた三ヶ月であった」(「効果」77頁)。紙類市場調査団は東南アジア、中近東、アフリカに派遣された。団長は市川義夫(本州製紙常務)であった。調査団は1955年4月にカイロで合同招待会を開催した。これには三菱商事、第一通商、日綿、丸紅、兼松、日商の関係者(各社二名、名前省略)が出席した。当時、エジプトには30人の日本人がいると指摘された。

日本の経済界はアフリカ独立の動きに理解を示した。『實業之日本』に掲載された「独立を叫ぶ植民地アフリカ」は次のように言及した。「われわれ日本人にとつても、遠方のアフリカ大陸とタカをくくつて傍観しているわけにはゆかない。日本の雜貨品が歓迎され、東南アジア以上に親日的態度をみせているのも、このアフリカ諸国である。…民族意識にめざめたアフリカ民族は、人種を云々する前に、まず独立をさげんでやまないのである」(79頁)。

佐藤巧二(大阪毎日新聞外信部)は「アフリカところどころ」(前特派員の思い出)を寄稿した。ゴールド・コーストのヌクルマ首相にとって佐藤特派員は最初に会った日本人記者であった(と思われる)。南ア連邦の人種差別について質問した佐藤特派員に対するヌクルマ首相の応えは次のように記述された。「南アの人々は本当に気の毒だ。だがあんな状態は長くは続かないと思う。ゴールド・コーストが独立してもアフリカの全黒人が解放されるのでなくては意義がない」といい切るあたり、黒人の自由のために生がいさをささげようという黒人首相の決意のほどもうかがわれた」(『サンデー毎日』1955年8月7日)。

大宅壮一(ジャーナリスト、評論家)は1954年6月、サンパウロ400年祭に招待され出席したが、その往時、北アフリカ・西アフリカを訪問した。その紀行記「アフリカ大陸」において、カサブランカ、タンジール、ダカールを紹介し、ダカールで出会った親日家のインテリ黒人に言及した。「モロッコの騒乱」(大宅壮一)は「フランスがアフリカを失う日もそう遠くあるまいと思った」(12頁)と解説した。その指摘は正しかった。しか

し大宅壮一はアフリカを「三等国以下」と見下していたのである。

向井啓雄（評論家、国際文化会館）は1954-1955年に英国とアフリカ諸国を訪問し報告を寄稿した。「黒い性戯・白い正義」はザンジバル、モンバサ、タンガ、ポートサイドの「夜の女性」についての物語である。そんな猥雑な話の合間でタンガニーカにおけるイギリスの落花生栽培計画の失敗に言及していることが注目される。「現地の實状にまったく通じていないイギリス本國の役人が立案し…机上プランにおわり、實行するにあたって、勞力や經費と収穫との採算がとれず見事に失敗したもの」（193頁）。落花生栽培計画の失敗は歴史的事実であり、その紹介は貴重である。「南ア連邦の印象」はケープタウン訪問記であり、「アパータイド」（アパルトヘイト）政策について論究した。

多様な人々がアフリカを訪れた。川喜田愛郎（千葉医科大学教授、細菌学）は1952年末から1年2カ月、カイロでウイルス学の研究と指導に従事した。木村睦夫（運輸省観光部計画課長）は1955年7月にエジプトを訪問し、与謝野秀大使と面会しJETRO事務所を訪問した（木村睦夫『山河を越えて』備北民報、2001年8月）。三宅秀乙（伊藤忠商事）はパキスタン滞在1年半の後、帰国途中、タンジールとエチオピアを訪問した。宮本又次（大阪大学教授）は1955年1月にエジプトを訪問した。山根銀二（音楽評論家）は伊藤鑛（鐵道技術研究所）、國松賢四郎（鐵道、電氣局）、梶山正雄（名古屋大学臨海実験所長）等と共にエジプトを旅行した。湯浅克衛（小説家）は1955年3月に南米移民船（ボイスベイン号）に同乗し寄港地のロレンソマルケス、イーストロンドン、ケープタウンから同乗記を『週刊読売』に寄稿した。湯浅克衛は1960年にも移民船に同乗した（湯浅克衛「移民船同乗記」『世界』114号、1955年6月；湯浅克衛『南米への旅』雪華社、1961年7月）。

『世界』（1955年3月）はアフリカ特集号「次はアフリカの番である」を組んだ。雨宮庸藏（讀賣新聞論説委員）「アフリカ民族主義の鼓動」は

「黒い民族主義」が「西欧支配への終止符」をもたらしていることを紹介した。「西欧がアフリカを支配した時代は終らんとしている。そしてその一番打者としてゴールド・コーストが起ち、ナクルマ黒人宰相がクローズアップされている。支配者はやがて支配されるであろう」(139頁)。

西野照太郎(國會圖書館調査員)「黒い潮」は「マウ・マウ團」運動が東アフリカの英領植民地全体に影響を与えていることに言及した。「キリマンジャロの麓タンガニーカでも、そこに住むキクユを通じてマウ・マウ團の活動が見えはじめた。…ケンブリッジ大學出の若いカバカ王が、1953年以來反英運動を起しているが、ケニアツタ事件あるいはマウ・マウ團の影響が無いとはいえないからである。…東部アフリカのイギリス植民地全體にわたつて、アフリカ人解放運動の黒い潮があげ潮のようにジリジリと擴がつている」(144頁)。ケニアのマウマウ運動がタンガニーカとウガンダに影響を与えていたのは事実である。その点に言及したことにおいて、西野論文は評価される。

上田秀夫(朝日新聞經濟部次長)「大陸飛びある記」は大陸各地の相違を紹介しながら、人種差別諸国における「有色人種」の日本人の「待遇」について苦悩した。「ケニヤや南ア連邦など“人種差別圈”でも、ホテルや乗物などでは日本人は前官禮遇?の一等國待遇で酒も自由に飲める。しかし、こんな前官禮遇にアグラをかく氣はちつともしない。“日本人は有色人種”だというのが、私の顔をアフリカという鏡に映した私の結論である」(148頁)。

『世界』(1955年12月)は小特集「砂漠の民族主義」を組んだ。西野照太郎「北アフリカの現状をどう理解するか」は北アフリカの民族主義を共產主義と批判する論調をとりあげ、『エジプト人の革命』におけるナセルの指摘を引用した。「各種のアラブ及びアフリカ人のナショナリズム運動の中に、『共產主義者の浸透』があるといわれてきた。…それらの運動は、自分達の國が外國の支配からの解放を實現したいという、ただそれだけの希

望をもつ、誠實な愛國者達によつて指導されている」（52頁）。

西野照太郎「日本とアフリカ」はもつと現実的な関心をアフリカに持つべきだと主張した。その際、西野照太郎は自分がアフリカ専門家になられたことについて次のように述懐した。「僕自身、アフリカについて専門的な知識を持つわけでもないのに、他にアフリカ問題を手がける人がいないため、いつの間にか「鎖を断つアフリカ」を書かされ、雑文に追われながら、アフリカ屋に仕立てられる様な実情を、淋しく感ぜざるを得ないのである」（29頁）。謙遜ではあるが、時代の要請に呼応した西野照太郎の姿勢を評価すべきであろう。

研究者の論文としては百々巳之助（日本大学法学部教授）「植民地に於ける議会政治の諸問題」がある。

『世界大百科事典 1（アーアン）』（平凡社）が刊行された。同書においてアフリカの基本事項は西野照太郎、能登志雄、山本謙吾、関敬吾、吉成大志等によって執筆された。『世界寫真地理全集 第3巻 印度・西亜およびアフリカ篇』はアフリカ各地とエジプトの歴史・芸術を写真で紹介した。『世界の教育』は世界各国の教育事情を紹介する中でアフリカの教育事情を取り上げた。山川出版社『世界各国史』（全12巻、補2巻）は1954年から刊行されたが、アフリカ史は含められなかった。

『アサヒグラフ』に掲載された「植民地の怒り」はモロッコ・アルジェリアにおける惨状を紹介した。写真雑誌に掲載されたのは外国の通信社の写真が多かった。そうし状況にあって、日本人の八木正雄がベルギー領コンゴのレオポルドヴィルで撮影した写真が「ベルギー領・アフリカ・コンゴ」として『国際文化画報』に掲載されたのである。「アフリカのコンゴ、カラー撮影は同地に旅行した八木正雄氏の提供によるもので、今年撮影したばかりの生々しい記録写真である」（編集室あとがき）。貴重な写真である。

（1955年の国際の最大の行事はアジア・アフリカ会議の開催であった。

アジア・アフリカ会議に関する多くの記事・論文が出された。その多くは本論では割愛している)。

12 1956年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

1月6日 日本政府はスーダンの独立を承認した(朝・毎)。1月13日 解説「海の向うの得意先② アフリカ」(朝)。1月24日 閣議は駐エジプト大使に土田豊をあてる人事を決定した(毎)。3月17日 青木繁特派員(カイロ)報告「エジプトの輸入削減政策」(毎)。3月18日 社会党国会議員団はカイロに到着した(朝)。3月30日 酒井特派員(カイロ)報告「日本のアドバルーン」(朝)。5月19日 大洋漁業は漁業発展についてエジプト政府に申し入れた(毎)。6月19日 日本政府はモロッコの独立を承認した(朝・毎)。6月26日 日本政府はチュニジアの独立を承認した(朝)。7月20日 日本の造船使節団は浚渫船の建造についてエジプト当局と協議した(毎)。8月1日 外務省はスエズ運河国有化問題を検討した(毎)。エピソード・エジプト大使は門脇外務次官に国有化措置について説明した(毎)。8月16日 ロンドンで開催されたスエズ国際会議に重光葵外相が出席した(毎)。8月18日 大平善梧「スエズ国際会議と日本」(毎)。8月21日 重光葵外相はダレス提案(米英仏の立場)を支持すると演説した(朝・毎)。8月25日 青木繁特派員(カイロ)報告「自主性のない態度軽く見られた日本 スエズ会議での立場」(毎)。9月6日 三井船舶の最上山丸はスエズ運河国有化後初めてスエズ運河を利用した(毎)。9月10日 政府は新設するカサブランカ領事に田村幸久(前ベルギー一等書記官)を内定した(毎)。9月13日 外務省はスエズ運河問題について検討した(毎)。9月16日 社説「スエズと微妙な日本の立場」(毎)。9月19日 解説(龍法 '19) 52-1, 168 (168)

「スエズ紛争 日本にどう響く」（毎）。10月6日 エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ一世が11月に来日すると報じられた（朝・毎）。エジプト政府は対日輸入無制限許可を発表した（朝・毎）。10月8日 岡正雄「成長する人類科学」（毎）。10月9日 藤山愛一郎（日商会頭、外務省経済査察使）と土田豊大使はカイロでエジプトのカイスニ経済相と会談した（朝）。10月30日 外務省はハイレ・セラシエ皇帝が11月19日に来日すると発表した（朝）。10月31日 土田大使はファウジ外相と会見した（朝）。11月1日 解説「スエズ動乱 日本経済への影響」（毎）。11月16日 藤山愛一郎（外務省経済査察使）は帰国した（毎）。11月19日 ハイレ・セラシエ皇帝は来日した（毎）。11月22日 大阪商船と川崎汽船は三井船舶の西アフリカ定期航路開設に反対した（毎）。12月3日 ハイレ・セラシエ皇帝は帰国した（朝・毎）。

アフリカと世界

1月10日 フランス・スペイン会談がモロッコ問題で行われた（毎）。1月14日 スペイン政府はスペイン領モロッコに自治権を与えることを決定した（毎）。1月23日 解説「これからの世界地図⑥ 北アフリカの植民地」（朝）。2月6日 国連安保理はスーダンの加盟を可決した（朝）。3月6日 解説「続これからの世界地図② “暗い大陸”の夜明け」（朝）。5月11日 英信託統治領トーゴランドの住民投票の結果はゴールド・コーストとの合併に賛成であった（朝）。5月19日 アラブ連盟はアルジェリア問題の国連提訴を決めた（毎）。6月18日 アジア・アフリカ・グループはアルジェリア問題で安保理開催を要請した（毎）。6月20日 鈴木支局長特派員（ワシントン）報告「アルジェリア問題 米、仏の政策を支持」（朝）。6月26日 国連安保理はアルジェリア問題の討議を阻止した（毎）。7月31日 国連信託統治理事会はトーゴランドとゴールド・コーストの統合を支持した（朝）。8月2日 フランスは仏領トーゴランドの住民投票を10月に行うと提案した（朝）。10月1日 アジア・アフリカ・グループはアルジェ

リア問題の上程を国連事務総長に要請した（朝・毎）。10月29日 仏信託統治領トーゴランドの国民投票の結果は自治要求であった（朝）。11月7日 モロッコとチュニジアはユネスコに加盟した（朝）。11月12日 国連総会はモロッコ、チュニジア、スーダンの加盟を承認した（毎）。11月15日 国連総会は南アフリカの人種差別問題とアルジェリア問題を議題とすることを採択した（朝）。11月26日 加瀬俊一国連大使は日本商社のスエズ清掃参加について国連事務総長に打診した（朝）。11月30日 スーダンはユネスコに加盟した（朝）。12月5日 信託統治委員会は明年3月6日に英領トゴランドの信託統治を終了することすなわちゴールド・コーストが独立する際これと合同させることを承認した（朝）。12月13日 国連総会は英領トーゴランドの信託統治の終了とゴールド・コーストとの統合を承認した（朝）。12月18日 英国下院はゴールド・コーストの来年3月6日の独立付与法案を可決した（朝）。

北アフリカ

エジプト

1月16日 ナセル首相は新憲法草案を布告した（朝・毎）。4月5日 イスラエル軍はガザを砲撃した（朝・毎）。5月1日 エジプト・イスラエル停戦協定が成立した（朝・毎）。5月25日 石川達三「エジプトの旅から」（朝）。6月13日 エジプト駐留英軍の撤退が完了した（毎）。6月23日 解説「きょうエジプト国民投票 初代大統領にナセル氏」（朝）。6月24日 ナセルがエジプト大統領に選出された（朝・毎）。7月22日 酒井特派員（カイロ）報告「革命と独裁と自由」（朝）。7月26日 ナセル大統領はスエズ運河の国有化を宣言した（朝・毎）。9月3日 解説「スエズ運河国有化と中東諸国の動き」（朝）。10月29日 イスラエル軍はエジプト領に侵入した（朝・毎）。10月31日 英仏連合軍はエジプト攻撃を開始した（朝・毎）。11月7日 スエズ停戦が成立した（朝・毎）。12月3日 英仏両国はスエズ撤退を決定した（朝・毎）。12月5日 英仏軍は撤兵を開始した（朝・毎）。

リビア

3月26日 ベン・ハリム首相の内閣は総辞職した（朝）。5月26日 エジプトとリビアは通商支払協定に調印した（朝）。10月31日 リビア首相はエジプト情勢に関連して非常事態を宣言した（朝）。11月1日 トリポリの油送管が爆発した（朝・毎）。11月3日 リビアは外出禁止令を出した（朝）。

〔チュニジア〕

2月27日 フランスとチュニジアは独立交渉を開始した（朝）。3月1日 チュニジア首長は制憲議会創設法に署名した（毎）。3月9日 フランスとチュニジアは会談を再開した（朝）。3月17日 チュニジアのランガム副首相はフランスとの会談が決裂したと発表した（毎）。その後、急転、交渉が成立したと発表された（朝・毎）。3月20日 フランスとチュニジアはチュニジア独立の議定書に調印した（朝・毎）。チュニジアは独立した。3月25日 制憲議会選挙で与党ナショナル・フロント（民族戦線）が全議席を獲得した（毎）。4月9日 チュニジア内閣は総辞職した（朝・毎）。4月10日 ネオ・デストゥール党のブルギバは組閣を依頼された（朝・毎）。4月11日 アミン首長はブルギバを首相に任命した（毎）。4月14日 ブールギバ首相の内閣が成立した（朝・毎）。6月15日 フランスとチュニジアの外交協定が成立した（朝）。7月13日 フランスとチュニジアの会談が中止された（朝）。9月15日 チュニスでストがあった（朝）。9月18日 ブールギバ首相はモレ首相と会談した（朝）。10月22日 チュニスでゼネストがあった（朝）。10月25日 仏軍はチュニジアに越境攻撃した（朝・毎）。フランス・チュニジア軍が衝突し犠牲者がでた（朝）。10月26日 チュニジア軍は国境に兵力を動員した（毎）。10月27日 仏軍とチュニジア人の衝突事件があった（朝）。12月10日 ブールギバ首相は仏と国交再開の用意を表明した（朝）。

〔モロッコ〕

1月11日 小島特派員（ラバ）報告「独立に酔うモロッコ」（朝）。1月14日 スペイン政府はスペイン領モロッコに自治権を与えた（毎）。2月11日 フランスとモロッコは議定書に調印した（朝）。2月13日 ユーセフ首長はパリに到着した（毎）。2月15日 フランスとモロッコの会談が開始された（毎）。2月21日 フランス兵と反徒の衝突でフランス兵10人が死傷した（朝）。2月24日 ポート・リヨテで暴動が発生した（毎）。3月2日 フランスとモロッコはモロッコの独立を承認する共同宣言に調印した（朝・毎）。モロッコは独立した。3月5日 スペイン領モロッコでデモ隊と警官隊が衝突した（朝）。4月4日 モロッコ首長モハメッド五世はマドリッドに到着した（毎）。4月7日 小島特派員（パリ）報告「モロッコ全土の独立へ」（朝）。スペインとスペイン領モロッコ代表はモロッコの完全独立についての共同宣言を発表した（朝・毎）。4月14日 スペイン軍はモロッコに上陸した（朝・毎）。5月28日 フランスとモロッコは外交協定に調印した（毎）。7月1日 「モロッコ民族解放軍」の一部が投降した（毎）。9月12日 フランス人61人が追放された（朝）。10月8日 タンジール問題会議はフェダラで開催された（朝）。10月23日 ベッカイ首相はモレ首相と会談した（毎）。モロッコの回教徒は白人52人を殺傷した（毎）。10月26日 ベッカイ首相は辞表を提出した（朝）。ベッカイ首相は内閣を組織した（朝・毎）。11月27日 港湾労働者はストをした（毎）。

〔アルジェリア〕

1月13日 小島特派員（アルジェー）報告「現地にみるアルジェリアの動き」（朝）。2月4日 モレ首相はアルジェリアに自由選挙を公約した（毎）。2月6日 モレ首相はアルジェーに到着し反対デモにあった（毎）。フランスのアルジェリア駐在相カトルーは辞職した（朝・毎）。2月9日 アルジェリア駐在相にラコストが就任した（朝・毎）。2月10日 アルジェーでゼネストがあった（朝）。2月13日 林特派員（パリ）報告「激化するアルジェリアの争い 左右両派が対立」（毎）。2月25日 反乱で43人（龍法 '19） 52-1, 172 (172)

が死亡した（朝）。3月6日 林特派員（パリ）報告「仏首相 アルジェリアに強気」（毎）。3月9日 フランス政府はアルジェリアへ部隊を増派した（朝・毎）。3月12日 林三郎特派員（パリ）報告「アルジェリア問題 平和解決の道遠い」（毎）。3月16日 フランス政府はアルジェリアへの精鋭部隊を増派を決定した（朝・毎）。3月19日 フランス政府はラコスト・アルジェリア駐在相に広範な権限を付与した（毎）。4月7日 反乱軍は死傷者百余名をだした（朝・毎）。4月11日 フランス政府はアルジェリア議会の解散を決定した（毎）。4月12日 反乱でフランス兵死傷者20人をだした（毎）。4月24日 親仏派村民百人が殺された（毎）。4月27日 小島特派員（パリ）報告「アルジェリア問題重大化」（朝）。5月2日 暴動で200人余が死んだ（毎）。5月11日 仏軍は反徒120人を殺害したと発表した（朝）。5月13日 コンスタンチヌで暴動があった（朝）。5月26日 反徒は欧州人12人を殺した（朝）。6月3日 仏軍は反徒150人を殺した（朝）。6月7日 解説「お先まっくらなアルジェリア」（朝）。6月29日 仏軍は反乱軍300人を殺傷した（朝）。7月18日 解放戦線は独立計画を提出した（朝）。8月3日 反徒60人が戦死した（朝）。8月27日 コンスタンタンで衝突があった（朝）。35人以上が殺された（朝）。9月7日 モレ首相はアルジェーに到着した（朝）。9月8日 テロがあり15人が死傷した（毎）。9月9日 反乱があった（朝）。9月11日 コンスタンチヌで衝突があった（朝）。9月24日 テロが激化した（朝）。9月27日 反徒80人が戦死した（朝）。10月4日 仏軍73人が死傷した（朝）。10月22日 ベン・ベラなど反乱軍指導者が仏空軍に逮捕された（朝・毎）。10月25日 アルジェリア国民解放軍は「徹底して仏と戦う」と発表した（朝）。10月27日 木保守彦「アルジェーのカスバをゆく」（朝）。10月28日 ベン・ベラ等はパリの刑務所に収容された（毎）。10月29日 解説「ベン・ベラ逮捕と北ア情勢」（朝）。11月3日 アルジェリア人46人が殺された（朝）。11月10日 仏軍は南アルジェリアで掃討作戦をした（朝）。サハラ砂漠で大油田が発見されたと伝えられた

(朝)。11月13日 仏軍アルジェリア司令官にラウル・サラン将軍が任命された(毎)。11月18日 仏警察は民族解放戦線の首領ウルド・オマル(ブジド)を逮捕した(毎)。11月19日 共産主義者130人が逮捕された(朝)。11月22日 仏軍は反徒を攻撃した(朝)。12月4日 仏内閣はアルジェリア地方議会を改組した(毎)。12月6日 仏警察隊は民族戦線指導者を逮捕した(朝)。

西アフリカ

4月3日 矢内原勝「英領西アフリカをみる 上」(朝)；続「中」4月4日、「下」4月5日。

リベリア

1月6日 ソ連はリベリアに援助を申し入れたことが確認された(毎)。

[ゴールド・コースト]

7月18日 総選挙で与党の議会人民党(会議人民党)の勝利が確実になった(朝)。9月18日 英国は黄金海岸が1957年3月6日にガーナとして独立すると発表した(朝)。

[ナイジェリア]

2月10日 森欧州総局長(ロンドン) 報告「多民族国家の夢 エリザベス英女王を迎えて ナイジェリアの動き」(朝)。

東アフリカ

[スーダン] (*独立以降、スーダンを東アフリカに入れる)

1月1日 スーダンは共和国として独立した(朝・毎)。1月19日 エル・アザリ内閣は信任された(朝)。2月4日 ソ連は外交代表の派遣をスーダンに申し入れた(毎)。7月4日 エル・アザリ首相は辞任した(毎)。各政党はウンマ党首アブドラ・カリルを首相に指名した(朝)。7月5日 カリルが首相に選任された(朝)。7月8日 内閣が成立した(朝)。

[ケニア]

10月21日 “モウモウ”の首領デダン・キマチは英警察隊に逮捕された(龍法 '19) 52-1, 174 (174)

（毎）。

〔タンガニカ〕

10月8日 英国のマーガレット王女はタンガニカ視察のためダルエスサラームに到着した（朝）。

〔セイシェル〕

3月9日 キプロスを追放されたマカリオス大主教はセイシェル諸島に護送された（朝）。

南部アフリカ

〔中央アフリカ連邦〕

9月24日 南ローデシアで鉄道ストに備え緊急事態が宣言された（朝）。

南アフリカ連邦

2月1日 ロウ（ルウ）外相はソ連領事館の閉鎖（ソ連との断交）を要求した（朝・毎）。2月16日 ソ連は3月1日までに総領事館員を引揚げると指示した（毎）。4月26日 南ア連邦は国連に復帰した（朝）。11月27日 ロウ外相は国連総会から南ア代表を引揚げると述べた（毎）。

1-2 報道と解説

エジプトと日本の関係が進展した。日本商品見本市は2月26日から3月11日までカイロで開催された。社会党議員団（河野蜜、横路節雄、江田三郎）は3月にエジプトを訪問した。石川達三（作家）は3月にエジプトを訪問し「エジプトの旅から」を寄稿した。エジプト政府は10月6日に対日輸入無制限許可を発表した。藤山愛一郎（外務省経済査察使）は10月9日にカイスニ経済相と会談し機械・部品等の提供用意をエジプトに申し入れた。エチオピアのハイレ・セラシエ皇帝は11月19日に来日し、12月3日に帰国した。

藤山愛一郎（日商会頭）は外務省経済査察使として中近東・アフリカ諸国を視察した。「八月から十一月まで外務省の経済査察使として中近東及

びアフリカ各國視察」(藤山愛一郎『私の自叙伝』学風書院、1957年9月、204頁)。1956年9月20日の出発、11月16日の帰国であった。帰国の際の空港での会見で藤山は次のように語った。「トルコ—エジプト—エチオピア—ケニヤ—南ア連邦—白領コンゴ—ナイゼリア—ヨーロッパ—イラクの各地を見てきたが、我々日本人が中近東、アフリカ地域の実情をいかに知らなかったかを痛感した。この地域には民族解放と独立の機運が高まり、熱意をもって立ちあがろうとしている。…これらの国に対して日本はどんな態度でのぞむか。…国政の根本方針をハッキリきめてかからねばならない時だ」(毎、11月17日)。藤山愛一郎は座談会「外から見た日本」において外務省の姿勢を次のように質した。「外務省から頼まれて査察に行ったからといって外務省のチョウチンをもつわけじゃないが、とにかくあんなケチな外務省予算では気の毒だ」(毎、11月25日)。これは藤山愛一郎の正論である。アフリカの「民族解放と独立の機運」を評価し、日本政府に根本方針の設定を要求したのである。その藤山愛一郎が1957年7月に外務大臣に就任した。

この年の第1の特徴は北アフリカ植民地のモロッコとチュニジアが独立したことである。モロッコは1956年3月2日に独立した。「仏、モロッコ独立認む [パリ2日発=AFP特約] 調印式は仏外務省でピノー仏外相とシ・ベッカイ・モロッコ首相との間に行われたが宣言文の内容次のとおり。一、1921年フェズで調印されたフランス=モロッコ条約は時代遅れであり、もはやこれでフランス=モロッコ間の関係を律するわけにはいかない。一、フランスはモロッコの独立を厳かに認めるがこれは特にモロッコが独自の外交と軍隊をもつ権利を有することを意味する」(毎、3月3日)。「モロッコ独立成る [マドリッド7日発=ロイター] スペインおよびモロッコは7日、過去44年間にわたるスペインの保護領モロッコに対する支配を終らせた共同宣言を行い、ここに統一された独立国モロッコが誕生した。スペインのフランコ大統領とモロッコのベン・ユーセフ首長をそれぞれ代表した

両国代表団が3日間にわたって交渉した結果この共同宣言となったもので、宣言は7日早朝スペイン外務省で両国代表により調印された」（朝、4月8日）。日本政府は6月19日にモロッコの独立を承認した。

チュニジアは1956年3月20日に独立した。「チュニジア独立調印 [パリ20日発=AFP特約] 仏、チュニジア両国は…チュニジアの独立を認めた議定書に調印した。同議定書のおもな内容は次のとおりである。一、チュニジアをフランスの保護領としたバルド条約はもはや両国関係を規制するものではない。一、1955年のフランス・チュニジア協約の各条項のうちチュニジアの独立に抵触するものは修正または削除される。一、チュニジアが外交、治安、国防の諸問題につきその責務を果すことを認め、国軍創設の権利を承認する。一、両国は追って“相互依存”の関係を定めることに同意する」（毎、3月21日）。日本政府は6月26日にチュニジアの独立を承認した。

第2の特徴はアルジェリア情勢が悪化したことである。フランス政府はアルジェリア国民になることを希望している人々を軍事的に弾圧し続けた。「北アフリカの植民地 今更、アルジェリアの原住民にフランス人なみの市民権を与えてやろうとしてみたとして、人心はとっくにフランスを去っている。…「フランス人になるよりも、アルジェリア国民になろう」これが切実な叫びであることが、未だにフランス人は解からぬらしい」（朝、1月23日）。「アルジェリア反乱軍首脳捕る [アルジェー22日発=AFP] モロッコから飛行機でチュニジアに向かう途中のアルジェリア反乱者首脳5名が22日地中海上空でフランス空軍に待伏せられ、アルジェーに着陸させられた後、捕らえられた。22日逮捕された5人のアルジェリア反徒指導者の1人であるアーメド・ベン・ベラは反徒の軍事指導者とみられている。ベン・ベラは38歳、…アルジェリア国民解放戦線の軍事委員会委員長となっていた」（朝、10月24日）。民族解放戦線指導者の逮捕はアルジェリア人のフランスに対する敵対心を高めた。

第3の特徴はサハラ以南アフリカの英領ゴールド・コーストの独立の予定が明確になったことである。西アフリカの英領ゴールド・コーストの総選挙は与党の会議人民党の勝利となり、1957年3月6日の独立が現実となった。「与党が勝つ ゴールド・コースト総選挙 [アクラ18日発=ロイター] 総選挙の結果与党の議会人民党(会議人民党)が104議席のうち53議席を獲得し、その勝利が現実となった」(朝、7月19日)。「英領西アフリカの黄金海岸独立へ 英国は18日英領西アフリカの黄金海岸は1957年3月6日独立すると発表した。黄金海岸は英連邦内で独立を獲得するアフリカ最初の黒人植民地で、独立後はガーナと改名される。(AP)」(朝、9月20日)。ナイジェリアも独立に向けて動いた。

スーダンには1956年1月1日に独立した。(スーダンは英国とエジプトの共同統治下にあったので北アフリカに入れてきたが、独立したことで、以下では、スーダンを東アフリカに入れることにする)。「スーダン正式に独立 [カルツーム(スーダン)1日発=UP特約] スーダンは共同統治国の英国およびエジプトの承認を得て1日正式に独立国となった。この日カルツームの政庁に青、黄、緑の新国旗が掲げられ、十万人を超える群衆が集ってスーダン国の歴史的発足を祝った」(毎、1月3日)。日本政府は1月6日にスーダンの独立を承認した。

ケニアではマウマウ団の首領デダン・キマチ(キマジ)が逮捕された。「モウモウ団首領捕う ケニアの反英テロ壊滅へ [ナイロビ(ケニア)21日発=UP特約] 英領ケニアの反英テロ団“モウモウ”の首領デダン・キマチは21日、英警察隊に脚部を撃たれて逮捕された。モウモウ団はかつてその数十万に及んだことまでであるが最近は数百名に減少していた。キマチの逮捕は…モウモウ団のテロ行為に事実上終止符を打つものである」(毎、10月22日)。

第4の特徴はポルトガル領アフリカ植民地で民族主義組織が結成されたことである。これはアフリカ植民地全域で民族主義運動が開始されたこと

を意味している。ギニア・カボベルデではギニア・カボベルデ独立アフリカ人党が1956年9月に、アンゴラではアンゴラ解放人民運動が1956年12月に結成された。ただし、日本の新聞はポルトガル領植民地における民族主義の動向については何も報道しなかった。

「暗黒大陸」の「夜明け」は趨勢となった。朝日新聞の記事「暗い大陸の夜明け」は時宜にかなった出色の解説である。この記事に付されたアフリカの地図は独立国と未独立国（植民地、保護領、国連信託統治領）を正確に表示した。「原住民の独立国はエチオピア、リベリア、エジプト、リビア、スーダンのわずか5カ国、南、中央両アフリカ連邦は独立国ではあるが、白人が支配する英自治領となっている。一億数千万の原住民にとって、アフリカはまだ“暗い大陸”である。しかし、民族主義の朝の太陽がここにもようやくさし始めた。まずサハラの北では1952年リビアが逸早くイタリアの手を振り切ったが、その西隣のチュニジア、アルジェリア、仏領モロッコでは、いま完全独立に向かって花々しい運動が続けられている。そしてナイルの上流では、今年、スーダンが一足先に共和国を宣言した。夜明けはさらに、サハラを越えて南へ——ジャングルの奥地にも訪れつつある。ここでは“光は西方から”さし出した。それは英領ゴールド・コーストの独立運動である。…東隣りの英領ナイジェリアも同じような条件で、やはり今年中に独立を実現しようとしている。この二つの植民地の動きは、ある程度の自治を許されている仏領西アフリカ、ウガンダ、工業化されたベルギー領コンゴ、人種差別の激しい南、中央両アフリカ連邦、反英気分の強いケニアなどに動き出した黒人民族運動に連鎖反応を起こさずにはすむまい」（朝、3月6日）。

新聞に掲載された記事では研究者の二つの報告が注目される。一つは矢内原勝「英領西アフリカをみる」（朝、4月3、4、5日）である。矢内原勝（慶應義塾大学経済学部助手）は1954年9月から1955年12月までロンドン・スクール・オブ・エコノミクス大学院に留学し、スターリング地域機構を

研究した。1956年初め、帰国途中の約一カ月、英領のナイジェリアとゴールド・コーストに滞在し、現地調査を実施し、その後、日本の貨物船美代玉丸で帰国した。現地報告を船上から朝日新聞に寄稿したのである。当時、矢内原勝本人はアフリカ研究者としての認識は少なかったといわれる。「私はややサハラ以南アフリカ経済の専門家というラベルを貼られた」（『矢内原勝教授退任記念論文集』慶應通信、1991年3月、262頁）と回想している。アフリカ研究者という範疇がまだ成立していなかった当時において、本人の自覚は別として、客観的に見れば、矢内原勝はアフリカ経済研究者になりつつあった。矢内原勝報告は西アフリカ（ナイジェリアとゴールド・コースト）の政治経済情勢を正確に紹介している。「ナイジェリアとゴールド・コーストは英連邦内において、ひいては国際関係において非常に興味のある問題を提出している。第一は政治的問題、すなわち英連邦内におけるその地位の変化、具体的には植民地より自治領へ昇格の問題であり第二には経済的問題、すなわちスターリング地域制度内におけるこれら二植民地の重要性、…第三にこれに関連して国際貿易上の二植民地の地位である」（朝、4月3日）。

二つは岡正雄「成長する人類科学」（毎、10月8日）である。岡正雄（東京都立大学教授、人類学・民族学研究者）は9月に米国で開催された国際人類学・民族学会議に出席した。岡正雄はそれまで出席してこなかったソ連の研究者、モスクワの民族学研究所所長代理のポテキン氏の報告と討論に注目し紹介した。「ソ連の見解が如実にうかがわれたのは、…ポテキン氏の「現代アフリカ農村の社会関係体制における民族社会関係の問題」という報告と、これについての討論であった。…問題の中心点は封建制の概念規定の相違にあったが、ポテキン氏は広い解釈をとるに対しフォルテス氏は封建制の軍事的支配の面を重要視しアフリカにはこのような意味で封建制は存在しないといいハースコヴィチ氏はアフリカの首長と村民との間に地代徴収の関係のないことを強調した」。資本制以前のアフリカの社会経
（龍法 '19）52-1, 180（180）

済構成体を封建制と理解するかどうか、研究者にとっては重要な論点であったので、アフリカ研究者にとっては貴重な報告と討論であった。これを紹介したことにおいて岡正雄報告は評価される。ただし、一般の読者にとっては理解が容易でない内容であった。岡正雄自身はアフリカ研究者にはならなかったが、日本アフリカ学会の創立（1964年）において、またアフリカ人類学研究者の養成において、重要な役割を果たした。なお、ポテキン（И.И.Потехин）である。

木俣守彦「アルジェーのカスバをゆく」（朝、10月27日）がある。木俣守彦（早稲田大学理工学部講師）は英国留学の途中、日本郵船栗田丸でアルジェーやタンジールを訪問し、アルジェー視察記を寄稿した。

映画では「暗黒大陸 マウ・マウ族の叛乱 SIMBA」が2・3月に上映された。「暗黒大陸」の広告は「白人を撃て！血に狂う土民の暴動 死を眼前にしながら恋の焰を燃やす若き二つの心」（毎、2月8日）であった。ケニア人の民族運動を「土民の暴動」と断罪し、これを軍事警察力で制圧するイギリス人の攻撃を美化した作品であった。原作者アンソニー・ペリーはこの映画の作成のためにケニアに出かけマウマウ団の残忍さを経験したと言われる（「SIMBA＝暗黒大陸＝」『英語研究』1955年3月、50頁）。その他、「ナイルを襲う嵐」「キリマンジャロの雪」「白昼の脱走」が公開された。